

## 言語・文化論序説：ことばと文化の関係を整理する ： 第三部 ことばと文化の復権に向けて

竹内，義晴  
九州大学言語文化部

<https://doi.org/10.15017/4288>

---

出版情報：言語文化論究. 3, pp.37-54, 1992-01-31. 九州大学言語文化部  
バージョン：  
権利関係：



## 言語・文化論序説

—ことばと文化の関係を整理する—

### 第三部 ことばと文化の復権に向けて

竹内 義晴

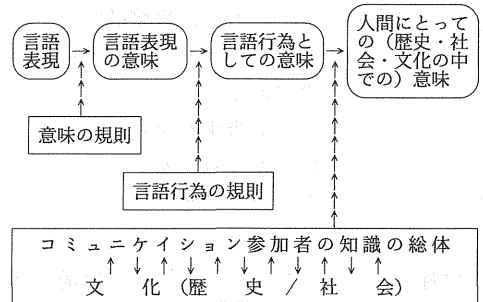
#### 3. ことばの意味と文化のかかわり

##### 3.0. 文化・社会・歴史の中の「意味」

「言語表現そのもの」が表現する「意味」というものがあり得る。そして、その意味とは、様々な世界の在りようを設定したうえで、表現と指示対象の関係として理解される性質のものである。そういうことを、これまでの議論を通じてある程度明確にしてきた。また、この「言語表現そのもの」の持つ意味と、言語表現がコミュニケーションの場で演ずる「言語行為」としての意味の両者の関連についてもすでに論じてきた。

しかしまた、すでに第一章で確かめたことなのだが、言語表現は人間の文化・社会・歴史の大枠の中で、それぞれの主体としての人間に対して、様々な意味を持つものである。そうした、人間にとっての、歴史・社会・文化の中での意味づけが言語表現にとっての「意味の全体像」を成しているのだと私は考える。この「意味の全体像」は「言語表現そのもの」の持つ意味、「言語行為」としての意味をすべてその全体に組み込むものであるが、図示すれば、(3.0) のようになる。

(3.0)



言語表現そのものとしての意味は、言語行為についての社会的慣習、規則、そしてさらに人間の様々な知識体系を反映して、コミュニケーションの場での言語行為としての別のレベルの意味を与えられる。その言語行為としての意味は、それぞれの人間という主体によって、さらに人間の文化・社会・歴史の中で、別のレベルでの意味を持っていくと考えられる。具体的に、どのようなことが、このような、ことばと文化についての総合的な理解から整理できるのか。以下では、そのことをいくつかの話題を扱いながら考える。

##### 3.1.1. スープを「食べる」vs「飲む」

文化の違いが言語表現の問題と結び付けられる例の常連に、スープは「食べる」ものか「飲む」ものか、という議論がある。英語やドイツ語では、スープを目的語にする動詞は、

日本語の食べるにあたる「eat」や「essen」である。ところが、日本語では「スープを飲む」と言う。これについては、「日本語の文化ではスープを飲み物に分類するのに対して、英語やドイツ語の文化ではスープを食べるものとするからだ」というような説明をするのが普通である。

しかし、スープを飲み物に分類したり、スープを食べるものに分類したりするのは、日本語の文化や、英語やドイツ語の文化であると言うのは誤りであると私は考えている。私の考えでは、この分類に強く関与しているのは、基本的には、ことばに直接結びつく文化ではなく、むしろことばとは独立のそれぞれの文化そのものである。

ナイフとフォークで食事をする文化の人たちはスプーンで掬ったスープを、スプーンの先の玉の部分ごと口の中に突っ込む。一方、この国のハシの文化で育った人間は、スプーンで掬ったスープをすすったり、口に流し込んだりする。この、それぞれの文化における人々のスープの摂取の仕方を、それぞれの文化のことばが「食べる」とか「飲む」とか表現しているわけだ。

ところで、それぞれの文化の枠の中においても、私たちは、実際にはスープに対して様々な摂取の仕方をすることができる。ハシの文化圏にいるからスープをスプーンで掬って口に突っ込んで食べることができないとか、ナイフ・フォークの文化圏にいるからスープをスプーンで掬って口に流し込んだり、すすったりできないとか、そういうことはない。そういう様々な、文化の常識を逸脱したスープの摂取の方法に対して、それぞれの文化で用いられる言語ではそれぞれに適切な表現の可能性を、何らかの形で用意しているのだと考えたほうがよい。

コップでゴクゴクとスープを飲む人のことを、イギリス・アメリカやドイツの文化の人たちは行儀が悪いと思うかもしれないが、

「スープを飲んでいる」と思うはずだし、そのように言語で表現できる。逆に、スプーンの先の玉の部分の口の中に突っ込む、イギリスやドイツの人のスープの食べ方について、日本の文化に浸かりきっている人たちは気づこうともしない。しかし、一旦、食べるという認識の仕方をしてからも、さらに「スープを飲む」とその食べ方を描写することはできにくいのではないだろうか。

言葉づらを何気なく読むと、「スープを食べる」とか「I drink soup」や「Ich trinke Suppe」という表現は確かに変な感じがする。文法学者の中には、選択制限という概念を使って、この問題を処理しようとする人たちもいる。その考えに従えば、英語やドイツ語の「soup」や「Suppe」という名詞の意味として、この名詞は食べるという意味の動詞「eat」や「essen」の目的語でなくてはならないというような、語彙の間の結びつきの特殊な制約関係があるということになる。また、日本語では、「スープ」という名詞は「飲む」という動詞の目的語になるように決まっているということになる。

計算機による自動翻訳のような目先の実用を考えると、ことばの記述として、選択制限を考えることは確かに便利には違いない。普通は、日本語が話される文化では、スープが食べられたり、またはそのように考えられることはないし、また、英語やドイツ語の話される文化で、「soup」や「Suppe」が「drink」や「trinken」されること、またはそのように理解されることは少ないからだ。しかし、そのように、実用の問題としてはあまり起り得ないことだからといって、観察の対象から外してしまってもよいものではない。

言語から表現されることがらへの方向に沿ってではなく、むしろ、表現される現実から言語への方向に沿って考えてみると、現実というのは、選択制限の発想に縛られるような、そんな不自由なものではない。言語その

ものを、規範や規則で縛ることができたとしても（私はそうは考えないが）、現実のあり方は、言語によって決定されてしまうような、融通のきかないものではない。スープをずるずる音を立ててすすったりするのはラーメンを食べる時には当たり前のことだ。場合によってはスープを氷にしてかじったりすることもあるだろう。とっぴなことを考えれば、私たちがスープを皮膚から摂取する新生物に生まれ変わったりする可能性だってあり得る。言語の意味記述の問題として、選択制限という考え方は間違っている。

言語によって表現される現実の側に、相当程度に（その現実での自然法則が許す限りにおいて）様々なことがらのあり様の可能性がある以上、言語の仕組のほうが、現実を追いつくを得ない。言語の仕組に合わないからその現実を認めないとか言うのだったら、それはもう、コペルニクスやガリレオの地動説を迫害した宗教の世界と変わらない。

地動説が迫害を受けたのは、その時代の言語が、「地球」という名詞が「まわる」という動詞の目的語となるのを禁じていたからではなく、その時代の文化・宗教が、地球がまわるという事実を認めたくなかったからだ。事実、ガリレオは「それでも地球はまわる」という表現を、（聞こえれば、また迫害されただろうけれども）言語表現としては全然問題なく口にすることができた。

同様に、現代の日本語で「スープを食べる」という表現が奇妙に聞こえるのは、言語の仕組のせいではない。現代の日本の文化では、スープを食べるといふ摂取の仕方があることは知られていないし、認められていない。それで「スープを食べる」という表現が表現していることがら、文化の常識の認めるところと異なると判断されるのである。選択制限を言語の意味の記述に取り入れようとするのは、この、現実の認識の問題と、言語の意味の問題をうまく整理できていないからだ。

ここでの議論によって、言語表現の違いと密接に結びついているとされる異文化間の相違の中には、言語との関係をあまり気にしなくてもよいものがあることが明らかになった。しかし他方では、「スープを食べる」という単純な言語表現をとってみても、その表現の解釈を歪めるほどに、文化における物の見方というのは、言語表現につきまとうものにはある。「スープを食べる」という表現が表わしている事態は確かに私たちの文化に囚われた常識と異なっている。しかし、うっかりすると、それだけのことが、そういう事態はあり得ないのだとか、そのような事態を表わす言語表現そのものが誤りであるという誤った議論に結びついてしまう。

私たちの日常の思考・認識は確かに文化の制約に囚われたもので、一定の決まりきった枠を超えるのは難しいことだ。しかし、それを不可能であると言い切ることもできない。そのような文化の制約を乗り越える可能性があるからこそ、異なる文化の間での交流において相互の文化における思考・認識の様式の違いを考慮しようという、人間の知恵が生まれてくるのだ。

歴史の中でそれぞれの文化は数多くの変革を経て今日に至っている。それらの変革とはその文化が、それぞれの時点での自らの枠を乗り越えることそのものだったはずだ。人間の想像力というのは文化の制約を乗り越える能力を備えているものだとは私は考える。

現実、そして現実を超えた事態について、それに対する認識を支えているのは文化の枠組である。しかし、人間の想像力に対して、事態についての新しい認識の発展の可能性、事態の在り様の無限の可能性を認識することを妨げているのもまた文化の枠組である。言語がただ文化に密接し、文化に絡め取られているならば、それは人間の想像力の足かせとなるだろう。しかし、言語そのものは、この事態のあり方についての無限の可能性に対し

て、それを写し取り、表現していく手段であるにすぎない。少なくとも、言語そのものは、語り得ぬ事態を語り得るものにするまでに、その表現手段としての体系を展開させてゆく潜在性を備えたものであろう。

人間は、歴史の流れの中で、絶えず見知らぬ物事に出会い、未知の対象に対する語り方を工夫してきた。そのような、人間の用いる道具として、言語は、文化の枠組を乗り越えてゆく人間の想像力の仕事を支える可能性を秘めている。

### 3.1.2. 「letter」vs「稟」と「書」再論

言語表現が、言語行為としてコミュニケーションの場で解釈されることは第二部で触れた。それぞれの言語表現が言語行為としてコミュニケーションの場で解釈されるのは、それぞれの言語社会が制度として持っている言語行為の規則・慣習による。

第一部でアヘン戦争当時、英語の「letter」を「稟」と翻訳すべきか「書」と翻訳すべきかが問題となったことに触れた。この点について、第二部で言語行為について議論したことを踏まえてもう一度検討を加えてみる。

私は中国語のことはほとんどわからないので、突っ込んだ話はできない。ここでも、第一部で紹介したことを踏まえて議論を組み立ててみる。ことばそのものの意味としては、中国語の「稟」と「書」という表現は、それぞれ請願と手紙を表す語彙であった。だから、英語の「letter」を中国語の「稟」に翻訳するのは確かに問題なのである。語彙としては、英語には「petition」という表現があり、「稟」と翻訳されるべき英語の表現は「petition」なのである。細かいことを言えば色々あるかもしれないが、ことばとしてはこれらの表現についての中国語と英語の翻訳の対応関係に問題はない。「letter」を「稟」と翻訳することは言語そのものにこだわるならば、

誤りなのである。

問題はむしろ、アヘン戦争まではイギリスの代表は「稟」という形式で中国側の商人を介してのみ文章を清王朝に提出してきた、ということにある。イギリス側がこんな簡単な誤りを長い間放置してきた。そのことの本質に迫らなければ、議論はことばのうわべだけをいじくりまわすことに終わってしまう。

言語行為としては、英語の請願 (petition) の行為も、中国語の請願 (稟) の行為も、身分・階級の下位の話し手が、上位の聞き手に対する行為である。ただし、稟の行為では、話し手と聞き手の間に仲立ちが立つということが異なる。話し手は請願の内容を聞き手が許可することを望んでいて、その許可を恩義を持って受けるつもりである、という点でも英語・中国語の違いはないだろう。話し手は、以上の意図を、自らの忠誠の心と共に話し手に理解させようとし、またそう理解させようとする意図をも理解させようとすることによって、請願の行為を成立させようとする。

イギリスの代表が「稟」という形式で、中国側の商人を介して文書を清王朝に提出してきたということは、まさに、彼らが請願 (稟) の行為をなしてきたということである。この事実は翻訳が誤りであるかどうかということとは全く関係がない。

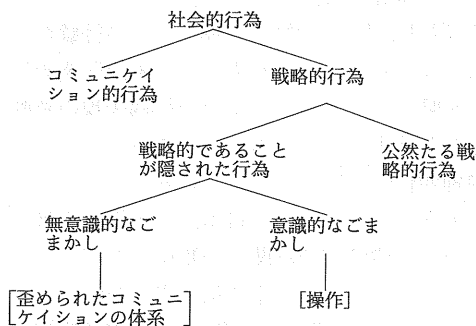
イギリス側が請願 (稟) の行為を続けざるを得なかった一つの原因は中国側にある。当時の中国の世界観からすれば、中国以外の国はすべて家来だった。だから、中国側にとって、彼らと対等の国、またはその上に立つ国というのは、現実の力関係は別として、世界観的にはあり得なかった。これは、中世のキリスト教の世界観が地動説を認めなくなかったのと同様のことだ。そして、このような文化的な背景を持った清王朝にとって、他所の国が請願 (稟) 以外の形式で接触してくることもあり得なかったのである。

イギリス側にとっては、中国側と接触を試みようとするのならば、請願（稟）という形式をとるか、何らかの方法で中国の世界観を修正させるか、どちらかの方法しかなかっただろう。そして、イギリス側は稟という形式を選んだ。

彼らがなぜ、この選択枝を選んだのかはともかく、彼らの取った言語行為が当時の当事者同士の間では成立していたのである。しかし、正確に言うと、彼らの請願という言語行為は、当事者同士の間では成立していることになっていたが、話し手にとっては実は、これは不誠実な言語行為であった。彼らには自分たちの国＝イギリスが中国よりも下位であるということは、その場しのぎのゴマカシだったのだ。彼らにはもちろん、中国の許可を受け、恩義を感じ、忠誠を誓うつもりもなかった。すべてが方便だったわけだ。

ハーバーマスは「コミュニケーション的行為の理論」1981で「社会的行為」を以下のように分類している。

(3.1.2)



この分類では、社会的行為は、コミュニケーション的行為と戦略的行為に大きく分類されている。ハーバーマスによれば、主体的な人間の間での理性に基づく、互いに納得した上での社会的行為がコミュニケーション的行為である。そして、それに対して戦略的行為が対置させられている。

この分類を借ると、当時のイギリス側の

行為は当事者同士にとっては、「コミュニケーション的行為」のような見せかけを持っていた。しかし、時代を経た私たちの目からみれば、「意識的なごまかし」であった。

この行為がイギリス側からの戦略・意識的なゴマカシであったのは、彼らの目的が、交易であったということを考えれば、容易に推測ができる。かれらの交易という目的は、瞬く間に、アヘンを用いた社会破壊、富の収奪という馬脚を現わし、清王朝の屋台骨を揺り動かしていった。彼らは請願（稟）の行為を選び、そしてその行為を続けてきた。それは彼らが本国と中国との力関係、利害関係を見すえた上での選択だったのである。

彼らにとっては、何らかの苦勞をして中国側の世界観・文化を変えさせるよりは、実質上の利益を名誉・対面に優先させて、請願という形式を取る方が手取り早かった。中国側が、外交の形式にとらわれている間に、イギリス側は、交易のきっかけをつかみ、着々と大掛かりな侵略の足場を固めていった。請願（稟）の形式の選択は、この戦略の一部分を形成するゴマカシだったと考えてよい。

確かに、イギリス側が清王朝に接触しようとする場合、請願（稟）という形式以外での方法はほとんどあり得なかっただろう。言語行為の制度の点で、中国側にとっては、相手国からの請願（稟）という形式以外での外国との接触はあり得なかった。彼らは中華的な世界観を背景にしており、外国をすべて自国よりも下位に位置づけていた。

国家間の接触を求めていたのは中国側ではなくイギリス側である。当時の中国は、自足していた社会で、外国との交易は必要でもなく、一部の商人を除いては、社会として外の世界には関心がなかった。このような場合、攻撃・戦争の可能性を除けば、接触を求める側が相手側の思考・行動の様式に寄り添う以外に外交の成立が難しいことは確かだ。

相手の世界観を変えるための試みを、根気

強く行うようなことも考えられるだろうが、接触がない以上は、なかなか時間ばかり喰う、見通しが立たない作業であろう。例え、ゴマカシであっても、相手側の思考・行動の様式に寄り添って関係を作ってしまう、というのは一つの思い切りであるかもしれない。しかし、平和と友好が目的であるならば、そのような乱暴な双方の接触の関係の成立の後にも、今度は力によらない関係を成り立たせてゆく努力があり得ただろう。

イギリス側が、関係を取りつけた中国側に対して行ったのは、アヘンを売りつけて、人心を荒廃させ、銀をまきあげて、社会の力を衰退させるという仕打ちである。きびしい帝国主義の事実だけが歴史として残った。

中国側はアヘンの取引・吸飲を禁止し、貿易もまた禁止していた。ところがイギリス側は、中国領外の海上に船を停泊させ、アヘンを蓄え、公然と密輸を行った。このようなイギリス側の振る舞いは、けっして中国側の心を開かせ、外国と対等の関係を築く気にさせる性質のものではなかった。中国側を威嚇し、戦争に引きずり込み、強引にその世界観を変更させた歴史は、けっして避けられないものではなかった。

異なる言語を用いる集団が接触する際に起きる問題を扱う場合、視野を言語そのものに留めていてはならない。さらに、言語行為の領域に視野を拡げればよいというものでもない。問題は、さらに、文化の枠組と歴史の流れの背景の中での、戦略、力のぶつかり合い・かけひきの問題にまで広がってゆく。そのことをここでの議論ははっきりと示している。

### 3.1.3. 待遇表現（敬語など）

敬語と言われる、一連の言語表現がある。単純に敬うだけのものでもなく、蔑んだり、恩をきせたり、オベッカをつかったり、複雑

な人間関係についての言語表現の仕方を含めてそういつているので、言語学では「待遇表現」という術語を当てている。朝鮮語などと共に、日本語が整った待遇表現の文法体系が備わった言語であることはよく知られている。この日本語の待遇表現の文法体系に対応するような言語的な表現手段は、英語やドイツ語には見られないものである。

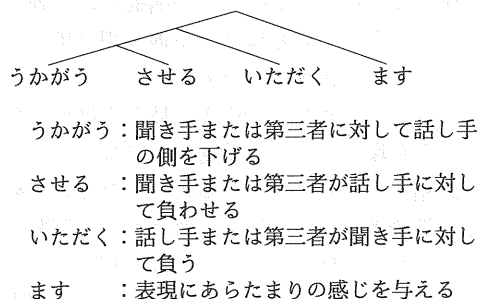
日本語には敬語の文法体系が備わっている、ということをごとさらに強調して、私たち日本人の文化や性格を特殊なもの、他の言語を母語とする人々には理解し難いもの、と主張するようなことが時々ある。そのような議論は、日本人や日本の文化を、「礼を重んずる、好ましいものだ」と考える人たちにとっても、また、「人間のしがらみをズルズルと引きずった不条理なものだ」と考える人たちにとっても、取り付きやすく、魅力的なものだ。しかし、この議論も、具体的なことから調べて、冷静に考えを進めてみると、非常に無理なものであることがわかる。

私はかつて、日本語とドイツ語の待遇表現の対照研究を共同研究として行ったことがある（丸井、松原、竹内、1987）。その経験から言えば、または、これまでの日本語研究の仕事を眺めてみても、日本語の待遇表現の意味論的な仕掛けは、基本的なところではかなり単純明快な仕掛けによっている。

大ざっぱに言うと、日本語の待遇表現は、言語的な側面にのみ関心を集中するならば、話し手からの、聞き手や第三者に対する「上げ」、「下げ」、「負い」、「負わせ」、言語表現についての「あらたまり」が組織的に複合したものである。特に動詞・助動詞や接辞の組み合わせを中心にした待遇的な表現の体系は非常に整然としていると思われる。第三章で紹介した内包論理学の理論に乗せた説明が容易にできるような、そういう明快な仕組になっている。例えば、「伺わせていただきます」という、かなりよく用いられる表現は、「待遇的

な側面に注目すると、(3.1.3.1)に見られる構造を持っている。このように図示すれば、それぞれの分節された単位の持つ意味合いが組合わされて、この表現の持つ敬語としての全体の意味が組み立てられていることは一目瞭然である。

(3.1.3.1)



ところで、この(3.1.3.1)でみた、それぞれの分節された単位の持つ意味合いは、決して日本語や日本文化だけに固有のものではない。例えば、次にあげる(3.1.3.2)のドイツ語の文は、変にへり下った、卑屈なものだ。なぜなら、この文は、それなりに、ドイツ語の表現手段を用いて、待遇的な関係をハッキリと表現しているからである。

(3.1.3.2)

es wäre sehr nett von Ihnen, wenn Sie mir erlauben würde, einmal Sie zu besuchen.

(もし、私がお宅に伺うことをお許しいただけるのならとてもありがたいのですが)

ここでの、待遇関係の表わし方は、もちろん日本語の敬語の文法体系とは違っている。「nett von Ihnen (聞き手の好意)」、「erlauben (許す)」などの個別的な語彙的な手段によって待遇的な関係が表わされている。「wäre」・「würde」のような動詞の接続法第二式という文法手段によって、「ことがらが現実的なことではない」という提示の仕方をする婉曲表現も、ここでは待遇的な関係を

表現している。このような手段の組み合わせなどでドイツ語においても様々な度合いの待遇的な表現が可能なのである。

待遇的な関係を表現するためにどのような言語的な手段を持っているのか、という点で当然それぞれの言語間に差異がある。それぞれの言語によって、大切にされる待遇関係もあれば、そうでないものもある。

しかし、日本語を知っているというだけの視点からながめて、そのような差異を根拠に、他の言語社会・文化に、そういう待遇的な関係を理解する基盤がないとは言えない。まして、そのような待遇的な関係そのものが日本語以外の言語社会・文化にはあり得ないとするのは乱暴な話である。それぞれの文化では、様々な待遇的な関係が質的に相当に異なっている。それらの関係を扱うに当って、その一つ一つの項目についての取捨選択の軽重に差異があることも確かである。また、それらの待遇関係を表現するに当って、日本語のように文法的体系となった道具だてを使うのか、それとも、個別的な語彙や、複合表現による手段によったり、または非言語的な手段によったりするのか、そういうことについて差異があるのも当然である。様々な文化においては、それぞれに待遇関係の体系があり、それをコミュニケーションの場に取り込む言語的・非言語的な様々な手段が用意されている。

様々な言語やその文化における待遇関係の全体という視点からとらえなおしてみると、「敬語を備えている」という理由だけで、日本語、そして日本語を用いている日本人や日本文化というものを、他の文化・社会・人々に対置して、特殊・特別視する議論の底の浅さが見えてくる。それぞれの言語・文化・社会を支え、そしてその主人公となっているのが生身の人間であることにさえ思いが至れば、その人々が生活するためにそれぞれの人間らしい関係を作り上げ、それを尊重し合っている

ることは当たり前理解できることだ。そこがわからないと、言語や文化の一面にとらわれて、自分にばかり都合の良い、手前勝手な議論をしてしまうことになる。私たち人間が、これらの待遇表現を用いる主人公であって、私たちはこの言語表現を、私たちの社会・生活の場で用いている、ということに考えを向けるとき、待遇表現の別の側面の問題が浮かび上がってくる。

私は大学という、比較的自由な雰囲気の仕事場において、人を持ち上げて表現したり、自分や他人をおとしめて表現するという意味での敬語はあまり使わずに生活している。しかし、私は決してそういう敬語を使えないのではない。待遇表現を含めた日本語の言語能力はしっかりと身につけてはいるのである。しかし、私は、必要最小限の場合においてしか、または皮肉を言ったりする場合にしか敬語を使わない。(そのような、敬語の表現を使って皮肉を言えるということ自体が、私が敬語を自由自在に使いこなせる証明でもある)

ところで、私が敬語を使えないのではなく、使わないという、この点に、言語の道具としての性格、そして、言語に対する人間の主体的な関係が明確に現われている。言語は、人間が、自分の判断で、自分の思想を表現するのに用いるものなのである。私は、人を持ち上げたり、自分や他人をおとしめたりすることが、コミュニケーションをする上で必要だと判断すれば、いつでもそのように表現することができる。あくまでも、待遇表現はコミュニケーションの手段であって、それを使いこなすのは主体としての人間であり、そこで重要なのは、スピーチアクトを決定する話し手の意図なのである。

しかし、「敬語表現」について、今述べたような、自分の自由な判断に基づいた対応ができるのは、私の場合では、仕事場の比較的自由的な雰囲気に大きく依存している。逆の見方をすれば、現代の日本に暮らしている人間

は、その時間の多くの割合を、会社などの、身分関係、集団の内・外の関係などに強く拘束された社会環境の中で過ごす、ということになっている。そして、その場合の「敬語表現」についての、それぞれの人々の対応は、決して「自分の自由になる」性質のものではありえないだろう。

例えば会社社会では、その組織での序列に従って、会話をする場合の待遇表現の用い方がカッチリときまっているようだ。だから、何かのトラブルなどで相手を持ち上げたくないような場合でも、言葉遣いだけは、シッカリと相手を持ち上げているといったことが起る。傍観者からみれば、これはもう、喜劇なのだけれど、持ち上げたくもない相手をことばの上では持ち上げなくてはならない当事者にとっては悲劇に違いない。

若い人々について、「敬語を使えない、敬語の使い方を知らない」ということは、いつの時代にも言われ続けてきたことなのだろう。しかし、このことは、ことばの能力や文法としての敬語の問題ではない。敬語を巡る、若い人々に対する不満というのは、時代による文法体系の変遷についてのものを除けば、実際は、言葉遣いの切り換えについての問題であることが多いのではないだろうか。

「言葉遣いの切り換え」というのは別の見方をすれば、自分の言語私用にかかわる意思決定について、組織の枠組による束縛にどのように従うか、または従わないかという問題である。

会社社会のような組織にかかわる生活空間では、人間は、自分の位置を外側からの枠で規定しながら、その枠内での言語私用、枠を越えた言語使用などを機械的にこなしていく。自分の置かれた状況を自分で判断して、自分なりに対応すること。このことは、人間を人間らしくあらしめる最も基本的な原則であろう。この原則が働く限りは、人間はどのような状況に置かれようとも、自分の位置を

確認して、自分の行動様式を様々な可能性の中から選択してゆく。

しかし、人間にとって、例えば会社組織のような複雑な社会は、必ずしも、明快な、自己の位置を自己測定できる環境ではない。たとえば、先輩・後輩関係や年齢関係そして役職関係の間に矛盾が生じたら、どれを優先させるのだろう。上役と友達になったらどうするのだろう。待遇表現の切り換えがうまく行えなくなってしまう根底には、実は、人間をとりまく環境の複雑さという要因がある。

このような、複雑さをさらに回避する手段として、最近取りざたされるのが、企業内での、「さん」づけ呼称の問題だ。「社長」とか、「部長」というのは、地位を表わす語彙を使った、最も単純な待遇表現手段なのだが、企業の組織の複雑化、対外関係などの問題とからんで、この待遇表現手段が、コミュニケーションを妨げ、生産性の向上には結びつかないことがあるらしい。

例えば、社内の役職変更が激しい場合、役職名を忘れてしまって、それを思い出せずに、話しかけそこなったら、企業のためにはマイナスである。それで、社内ではすべて「～さん」で呼ぶことに統一しようというのである。

私は、だいたい、誰にでも「～さん」と呼び掛けて、先輩からたしなめられたり、生意気だと思われたりするほうだが、だからといってこのような試みに単純に賛成できるというでもない。そのような試みをしている企業の様子を聞くと、それなりに定着しているようだけれど、別の企業などとの関係では、また困ってしまったりするというようなことも聞く。結局、言語生活というのは、自分で自分のことを位置づけて、主体的にことばを使うことがなされないかぎり、枠組を制度でいじったとしても、人間は自由で豊かな対応をするということはできないのだろう。

言葉遣いを管理することが人間を統制して

いこうとする道具であるからこそ、そのような社会では、敬意を表わしたくない人間に対してまで尊敬したり、自分を落としめたりする表現を使わなくてはいけない。そして、このことは、突き詰めて考えてみると、単に言葉遣いの問題にとどまらない。確かに敬意を表わした表現というのは、まさにその誰かに対する敬意を表現している。自分を落としめた表現というのは、まさに自分に対する落としめを表現している。

自分の考えについては、それぞれの場面によっては、そのような考えを持っているような振りをすることもできる。しかし、近代以降の人間の最も基本的な権利の一つである、思想・信条の自由という点から考えれば、そのような振りもまた、やはり個人の自由意志に基づいてなされるべきものだ。ある社会における人間同士の待遇的關係を、それなりに便法として認めていこう、と個人が自由意志に基づいて判断するのならよい。しかし、その範囲も越えて、組織の問題として、自分の考えにそぐわない待遇的關係をことばに表現しなければならぬのなら、それは、言語的にというより、むしろ人間の思想・精神の状況として相当に問題である。

この問題は、言語そのものをめぐる問題ではないが、言語の問題に関心を持つ人間がそれを避けて通ればよいという問題でもない。言語や文化などの限られた現象に視野を狭めた上で、日本人や日本文化、そして日本語の特殊性を言い立てるような議論をしてはならない。むしろ、このような言語現象を巡って私たちの社会に実在している歪みを直視し、その問題に立ち向かうことを考えることのほうがよほど大切なことなのではないだろうか。

### 3.1.4. 「日本語」、「国語」、「母語」

例えば、「国語」と「日本語」という二つの

言語表現は、同一の対象、日本語という言語、を指示する、と一般的には理解されがちである。しかし、このような理解は決して正当なものではない。

現在、この言語を話す人々が主に暮らしている日本列島が「日本国」という単一国家によって統治されている時代においては、確かに「国語」と「日本語」は同一の言語である。しかし、この国家統治の状況が変わって、日本語を話す人々の社会が別の言語を話す人々の社会の支配下に置かれる。そして、何らかの日本語でない言語が私たちの唯一公的な言語となる、そういうことは可能性としてはあり得ることだ。そうでなくても、明治以降、そして、1945年以降のアメリカ軍占領下の日本でも、日本語を廃止して英語とかフランス語をこの国の言語にしようという議論が日本人の側から出されたりしたことすらある。

このような仮定のもとでは、「国語」と「日本語」は、その指示対象を変えるだろう。表現「日本語」は相変わらず日本語を指示するのに対して、「国語」の指示対象は、その、なにか日本語ではない言語になるわけだ。「日本語」と「国語」が同一対象を指示する、という一般性は一種の虚構である。

日本語という言語を使ってきた社会の統治状態、公用言語などの状況が変わるということ を考慮に入れると、この二つの表現の意味の違いは、その輪郭を明らかにしてくる。このことを考えると、二表現の意味の違いは、多世界意味論の枠で納得することができるものようである。一方で、「国語」という表現は、言語と国家とのかかわりを、意味の要素に含んでいる。それに対して、「日本語」という表現では、言語と日本という地名、または民族・社会とのかかわりが重くみられていて、国家とのかかわりは、必ずしも意味を持たない。それで、解釈の枠組において、言語と国家とのかかわり方が違ってくると、その表現の意味の違いが明らかになってくる。日

本語が日本列島を支配する国家の公用語でないような設定の世界では「国語」の指示対象は日本語ではない、ということになる。

しかし、私は、この章では、「日本語」と「国語」という表現をめぐる問題は、実は、多世界意味論の枠で納得できる意味の領域のみにはとどまりきれない性格のものだ、ということをもっと大きな枠組で議論したい。

「国語」の意味を「日本語」の意味と同一視する「一般性」は一種の虚構である。この虚構は、さらには、この国が日本語を話す人間集団の統治下にあるということが一般的・当たり前であるとする、故意、または無意識の思い込みに基礎をおくものである。この思い込みの虚偽性もまたはっきりと批判しておかなければならない性質のものである。

例えば、この日本列島にアイヌ語に由来する地名が数多くある。私の育った長野県の塩尻市の東にある山の名前は「高ボッチ」という。この「ボッチ」というのはアイヌ語に起源を求められるそうだ。アイヌ語を話す人々の社会が、北海道だけではなく本州の相当部分まで、その勢力下に治めていたことは容易に想像できる。その、勢力関係が今日のように変わってきたのは歴史の中での一つの可能性が実現したのにすぎない。

ところで、近代からの日本の政府は、アイヌの人々に対して、その民族・文化・言語的統一を一方的に踏みにじる政策を一貫して取り続けてきた。その居住地を取り上げ、生活を分断し、日本語を強制してきた。このような事実を省みるならば、この国が日本語を話す人間集団の統治下にあるということが一般的・当たり前であるとする思い込みの虚偽性が浮かび上がってくる。だからこのような思い込みは、抑圧されてきた人々の痛みをさらに踏みにじるものなのだ。そして、そういう思い込みは、それらの人々の民族・文化・言語が生き延びてゆく僅かな可能性をすら認めようとしない、現在の私たちの社会の姿勢を

支えているものでもある。

さらに議論を進めれば、日本語以外の言語を自らの言語とし、歴史的にこの列島に居住している、または居住を余儀なくされている人々は、アイヌ語を話す人々だけではない。例えば、第二次世界大戦の始まる前から、戦中にかけて、日本の国家・社会は多くの朝鮮の人たちを強制連行してきて炭鉱や土木現場で使役した。その大勢の人たちがこの列島のいたるところで生活している。

国家の政策によって、中国大陸へ侵略的に移住させた、そして敗戦の際に対ソ戦線の最前線に置き去りにしてきた人々を、そして、その義父母や親族を、日本国家は、最近になって日本の社会に受け入れている。日本の社会に受け入れられた中国の人たちはもちろん、幼時に大陸に置き去りにされたこれらの人々も、当たり前のことだけれど、中国語しか話せない。

これらのことがらは、私たちの国家が引き起こしたことであり、その政治には今も政治や社会に影響をおよぼしている人たちも関与していた。今の私たちの社会と全くかけはなれた大昔のことではない。現在の日本国家が、僅かでも、歴史の中での自らの責任を担う美德を備えていれば、これらの人々ために朝鮮語や中国語を日本語とならぶ公用語とすることもあり得るだろう。

逆の見方をすれば、これらの、この列島に暮し、日本語を自分の言語としない人々が、日本の社会は決して単一民族の社会ではない、と主張するとき、「日本の社会が単一民族の社会である」という命題の虚偽性だけが非難されているのではない。そのような虚偽性を主張する裏に隠れた、例えば、朝鮮半島などの植民地において言語を強要してきたというような、私たちの国が犯してきた様々な民族に対する犯罪の歴史をきびしく批判しているのである。さらには、その犯罪の歴史を覆い隠そうとする、日本の国家・社会の企み

と、そのような企みを絶えず必要としている社会構造の矛盾を批判しているのである。

この列島の社会が日本語を話す人間集団の統治下にあるということが一般的・当たり前であるとする思い込みは、私たちの社会の歴史に対する無責任な姿勢と非常にかかわり深いものだろう。私たちの位置する所を歴史の中で確かめてみるならば、そのことは簡単に理解できることだ。そして、この思い込み・歴史に対する無責任は、私たちの社会の仕組を背景にするものなのである。

ここでもう一度、「日本語」と「国語」という表現についての議論に戻る。表現そのものの意味の違いということだけに限定すれば、「日本語」と「国語」についても、すでに述べたような多世界意味論的な理解で問題はない。しかし、この列島の社会が日本語を話す人間集団の統治下にあるということが一般的・当たり前であるとする思い込みがある以上、その事情は異なってくる。

現代の日本社会において、「国語」という表現を用いることが「一般的」であることは、小・中・高等学校の日本語教育に対する教科名、相当数の大学、特に旧帝国大学などにおける、日本語・日本文学を担当する講座・学科の名称をみても明らかだ。現代、この社会においては「国語」という表現が圧倒的に優勢に使用されているが、このことは、半ば制度化していると言ってもよい。この半制度の背景には、この列島の社会が日本語を話す人間集団の統治下にあるということが一般的であるとする虚構が隠れている。その虚構は、社会・歴史を理解するまえに既にその枠組を設定してしまうような、一種の文化・制度であるのだろう。

一口に「文化」と言うけれど、社会の中に利害を異にする集団が複数個あれば、その数だけ対立する文化が存在すると考えることは不当なことではない。そのように考えると、この「日本語」を「国語」としたがる「文化」

は、歴史の中で弱者の立場に立たされた人々に対して、文化・思想において敵対するものだし、さらには社会利益の点においても敵対するものである。

このような対立関係について批判的に目を向けるのは、一般に、「傷を受ける立場」の人間であり、また、社会の動きと歴史の流れを全体として把握し、弱者の立場に理解が及ぶ人間である。

先に述べたように、日本の小・中・高等学校では、日本語教育についての教科名は「国語」である。法律とか、文部省の教育指導要領によって定められていることだから、政府の管理下にあるそれぞれの機関は、公式の場でこの表現を用いている。そして、そのような制度のもとで、この国で公認されるべき言語は日本語ばかりではない、と考える人々やその子供たちが、日本語を「国語」とする学校に通っているのが現実である。

日本の学校では、日本語の勉強について、勉強する人たちが日本語をこの国の国語と考えるかどうか、そういうことには、一切お構いなしに「国語」を勉強したとする。そのことばの使い方の「効力」は、日本語を国語とは考えたくない人々の「心に残る傷」である。取り立てて問題にしない限り、意識されるものとはならないのだけれど、「国語」という表現は、「日本語」という表現とは違った現実的な「効力」を持っているのであり、日本語を国語とは考えたくない人々に対して、日本語を国語だと強要する暴力を絶えず行使していると言える。

面白いことには、大学などでは、外国人留学生の勉強する日本語は「日本語」と呼ばれている。たいていの場合、外国人留学生は、この国に滞在することが、私たちの社会の責任によるものではない。だから、彼らは、自分の話す言語をこの国の公認の言語にすべきだとは言わないし、そんなことを言う筋合いのものでもない。そういう人たちの勉強する

日本語は「日本語」であって、「国語」ではない。「日本語は『国語』ではない」と主張しない人たちには、日本語を「国語」とさせようとする押しつけはない。利害の対立があるからこそその「文化と言語の押しつけ」なのである。

私たちの国は、第二次世界大戦の前段階から戦争中にかけて、朝鮮半島の人たちに朝鮮語の姓名を日本名に変えさせることをしてきた。その国家が、この国に住まざるを得なくなった人たちに、継続して日本人らしい名前をつけろと強要してきた。言語は国家による、少数者への権力行使の手段として機能してきたのである。

法律などの制度による「ことばの強制」の背後には、暗黙の意図が介在していると考えていい。その意図は、いずれにしても、強制を受ける側から指摘されないかぎり、明るみに出にくい性格のものであるが、しかし、歴史の大きな枠組においては、決してあいまいにはされえないものである。不本意のままに日本名を強要される人たちにとって、この日本名を強要する役人、行政、国家・社会の行為は、悪意・いやがらせ等に基づくと理解されて仕方ないことであろう。

### 3.2. ことばと文化の関係を踏まえて議論し行動する

ことばを巡るさまざまな事象には、様々な文化的・社会的・歴史的諸関係が付きまどってくる。言語表現の意味と現実との対応関係を考える場合でも、言語行為としての解釈においても、さらにはより大きな社会的行為として解釈される場合でもそうである。ことばが人間によって用いられるかぎり、人間の生活に付きまとうさまざまな要因が絡んでくるのは避けられない。

私がこれまでの議論で強調してきたことの一つは、ことばそのものの問題を、ことば以

外のいろいろな要因と混同して考えるべきではないということである。言語そのものの成り立ちを、文化・社会など、様々なシステムの成り立ちと混同せずに捉えてゆくことの大切さをここで強調しておきたい。

しかし、私が強調したかったもう一つのことがある。それは、ことばに絡んでくる、様々な人間の営為として引きずっている要因をしっかりと見すえなくてはいけないということだ。このことを怠ると、それぞれの場合において、ことがらの本質を見誤ることになる。それらの要因を扱ってゆく場合に、さまざまな人間領域について、それぞれの論理で整理してゆかなければならないのである。

言語には、文化を始め、人間の諸生活・歴史・経済がある程度反映しているという考え方について、過ちであると言い切るわけにはいかない。また、文化と人間の諸生活・歴史・経済との間の関係も一定の反映関係にあることは確かである。しかし、だからといって、言語の研究が文化・人間の諸生活・歴史・経済の解明そのものにはならない。また、文化の研究が人間の諸生活・歴史・経済の解明そのものにもならない。これは理屈の筋道として当然のことである。逆に、文化論でもって、言語の問題を片付けたり、文化の問題を社会・経済・歴史的な議論でもって済ませたつもりになってしまうのも理にかなわないことである。

あるシステム A (例えば、文化) を、別のシステム B (例えば、言語) に投影されている映像から探ろうとする場合、A から B への投影関係の精度・歪み・偏り・バラツキなどの要素を知っていないとならぬ。そして、その要素を知るためには、システム B そのものの研究、そしてシステム A についての、システム B 以外のシステムとの関係など、多角的な視点、総合的な視点からの研究が必要である。ことばの問題とからめて文化論などに向かおうとするのだったら、そういった注意深

さが必要なのである。

異言語・異文化が接触する場での問題を扱うのに、言語や、文化を独立させて扱うことができるとは考えられない。議論の対象は、血の通った人間の生きている現実の上に成り立っていることがらである。言語体系(文法)の対照研究や、文化の比較研究をするのとはわけが違うのである。

力のせめぎあい、利害の対立、または調和の上にことばと文化が乗っている、このことは一つの事実だ。そして、私たちがことばを使って生きているという現実を正確に理解することは、今日の世界においてとても大切なことのように思われる。

現代の日本の社会は、国際化の波の中で、他の社会との関係を、様々なレベルで、より真剣に考えてゆかなければならない時代を迎えている。社会と社会のぶつかり合いの中で、様々な対立が生れる。その対立を処理するのに、戦争をして、力づくで自己の利益のために不利益を相手に押しつけるということをしてはならないことは言うまでもない。対立を、決定的な衝突なしに、いかに消化していくのか。その見通しを持った上で、相互の文化・考え方を尊重し、また自己の文化を主張し押し出してゆく、直接的な利害の調整を図る、ということが重要なのである。

そのような相互の文化を尊重した対立処理の方法というのは、歴史の過去・未来を見すえた見通しを持たずにはありえない。歴史の流れの上に文化は成立し、そして更に歴史を作ってゆくのである。ヤミクモに目先の利害にとらわれて、他国へ出かけて行って、お金をばらまいたり、生活を破壊したり、身勝手な自己主張をする。同様に、他の言語・文化などなどを受け身で取り入れ、理由もなしに自分の仲間に対して有利に立つただけに利用しようとする。そんなことが、わたしたちの社会では、この百年来続いてきた。

国際化社会に対応するために、中等教育に

においてネイティブスピーカー教員を導入するなど、外国語教育を充実しようという施策が、少しずつ具体化してきているようだ。若い人たちの外国語能力、外国語によるコミュニケーション能力が伸びてゆくことは素晴らしいことである。しかし、それだけでは、私たちの社会が国際化社会に対応してゆくために本当に必要なこととはずれている。

ことばによるコミュニケーションの背後には文化がある。文化の背後には経済・社会関係があり、歴史があり、思想がある。ことばによるコミュニケーションが量的に拡大すればするほど、社会間・文化間に対立の生ずる可能性は大きくなる。コミュニケーションの背景についての教養のあるなしにかかわらず、対立の生ずる可能性はいずれにしても大きくなるだろう。しかし、その対立に対処してゆくにあたっては、コミュニケーションの背景についての教養がなければ、戦争などのその場しのぎ以外に打つ手はなくなるだろう。

私たちの社会の若い人たちが歴史を勉強し、文化や思想についての教養を身につける機会はますます減少している。日本の歴史や文化については、皇国史観などでねじまげられた教育を権力・政治がらみで子供たちに押しつけることが平然とまかり通っている。文部省の教科書検定の反動化をみても、現代の社会についての勉強も、様々な事実が、さまざまにねじまげられ、嘘で固められて、子供たちに押しつけられている。そういう、デタラメが、教育にたずさわる人間を離れた、権力の場でなされてしまうのである。

教養のない日本人、嘘、デタラメしか知らない日本人、そんな日本人が、外国語をペラペラあやつれば、その歩いた跡は恥の山となるのは、すでに現実の問題である。「日本は単一民族社会だ」とデタラメを言ったのは在職中の総理大臣だった。若い人たちに外国語を教えるのだったら、それにふさわしい教養を

身につけることを考えないかぎり、実りの多い結果は決して期待できない。

私たちの異言語・異文化に対する現状は、多様な言語、多様な文化のそれぞれに、それなりの価値を認めているとはとても言えない。日本で外国語として教えられているのは、ほとんどの場合、西洋語、それもたいてい英語なのである。世界の中で交流が盛んになれば、一層、様々な言語を用いる社会との接触の機会が増してゆく。様々な社会は、それぞれに、様々な文化を抱えている。その文化を理解・尊重することなしに、友好関係が成立することは難しい。様々な社会で独自の言語を話し、独自の文化を担っている、一人一人の人間が、互いにそれなりの価値を認め合ってゆくことが大切なのであり、そのためには、もちろん、その社会で話される言語の習得だけでは足りない。

どこの国の街角に立っても、そこの人々が何を話題にし、何を想い、どんな人間のつながりを創っているのか、それは最も興味深いことがらである。人々が何か熱心に話し、共感に心をつなぎ、心を燃やしている。そんな場面に出合った時、ことばや文化、知識の積み重ね、思考様式の違いという壁の存在はどれほど悔しく思えることだろうか。彼等のことば、彼等の歴史、彼等の文化について、勉強の積み重ねがあれば、そういう悔しさも、それほどではなかっただろう。後悔は先に立たない。人間、互いに話ができればそれでよいというものではないのである。

ことばを用いて生活している私たちが、ことばを用いて生きている意味を問い直すことができるようになるためにも、私たちは、ばく然とした外国語というのではなく、また、特に国籍不明である英語とは別に、何かのことば、確かな歴史と文化の背景を持って、生活をしている人々に用いられていることばに関心を向けて然るべきなのである。

ことばと文化についての考察を、より大き

な枠組の中で捉える必要がある。これまで、この問題がより大きな枠組の中でどのように整理されるのかを、私なりの仕方でも考えてきた。ことばや、文化をめぐる問題は、人間とのかかわりで議論するかぎり、ことばそのものや、文化そのものの枠の中に閉じ込めてはならない性格のものである。

「ことば」は世界・様々な対象を反映しながら、記録に留め、自分の中に取り込むという特殊な性格を持っている。だからこそ、ことばについて記述すれば、それですべてわかったような錯覚に陥ってしまう。しかし、ことばは、世界を映し出す手段であっても、世界そのものではありえない。

ことばの意味が形づくる何らかの「宇宙」は人間の認識、確信のようなものを反映することがあるかもしれない。しかし、もしそうであるとしても、その反映関係が、その認識や確信の正しさ、正当性を示すことにはならない。そのような錯覚に陥ることによって、世界の現実を見過ごしたり、認識・判断を誤ることもあるかもしれないのである。

「言語＝文化論」もまたそのような性格を持っている。歴史・社会のコンテクストを無視したり、または意図的に改ざんした上に作りあげられる言語＝文化論は、人々の認識を誤らせ、人々の意識を現実からそらす役割を果たしてきた。

ことばや文化を巡る議論は、以上のような現実的な観点からも重要な意味合いを持つ。人間はことばを使い、知恵を働かすからこそ、誤りに引っ掛かりやすい。そのような誤りによる停滞を避け、またそこから抜け出すために、これまでしてきたような議論が役立つことがあるかもしれない。

ことばを使い、文化に囲まれながら生きている生活そのものが混沌として、その生きている自分にも何が何やらわからないような気がする時、私たちはその混乱を解きほぐす必要がある。実用に役に立つことを直接の目的

にしない科学の、科学としての存在理由は、そういうことにあるのだろう。そしてそれは本質において知的なことなのである。

### 3.3. 最後に — 事実と自己、時代を見つめたことばと文化の議論をめざして

「柳川堀割物語」(宮崎駿＝制作・高畑勲＝監督)という映画がある。この映画をみると、日本と言う生活の場は昔から水を大切にしてきたのだということがわかる。私たちの祖先は、古くから、水源となる山林を育み、水路を縦横にめぐらし、ため池を作り、水田一枚一枚に水を蓄えてきた。水の神を祭り、水をおろそかにすることを、汚すことを恐れてきた。それは、この狭く、山野の険しい島で、限られた水を海に逃がさずに、最大限に利用し、生命の体系を維持し、人間が生き延びるための英知であった。

ところでこの映画は、今日のこの国の生活が、いかにこの知恵を失い、川を埋め、水を汚し、自分たちの生活を破壊してきているのか、ということ私たちに突きつけている。柳川の街をめぐる生活を支えてきた堀割は、一時期、悪臭とごみのドブと化していた。その堀割を辛うじて蘇らせ、水と共に生きる生活を取り戻し、知恵を取り戻した柳川の人々の快挙をこの映画は称えている。

私がこの映画について触れるのは、ここに文化の問題があると思うからである。水を大切に、自然とつき合う人間の知恵、これこそが文化なのだと思う。

音楽や、絵画、舞台芸術や文学、高級料理のような類のものを文化と言うことがある。また、物事の認識・理解の仕方、価値づけの仕方、考え方の様式をさして文化と言うこともある。私はこの二番目の意味合いで、「文化」ということばを使ってきた。現代科学のとらえる文化というのはそういうもの見方なのである。

古典芸能にお金を出したり、神社の建物を修理したりする。芝居や古典芸能、オーケストラを支援したり、美術館を作る。そういうことで、日本の文化を大切にすると称して、満足していることがある。しかし、それでは文化は「死に体」なのではないか。文化といわれるものを私たちの生活・歴史の中に捉え直すことができなければ文化は生きたものとは言えないのではないか。

芸術と呼ばれる一連の物事、そういうものが無意味であるとか、文化ではないと言うつもりはない。ものごとを楽しみ、想像力を働かせて生きてゆくのは、人間の最も本質的な欲求の一つであるだろう。その欲求を満たすために人間はいろいろな様式を作り上げ、伝承してきた。その意味合いが活かされている限りにおいては、芸術は生きた文化である。しかし、そのような芸術が文化であるとしても、それは人間の英知としての文化の一角を占めるにすぎないのではないだろうか。

自分たちの生活環境を守り、食を得て生き延びる、そのために、例えば、水を大切にしてきたこと。そのために河川管理・耕作形態を工夫し、生活のスタイルから祭に至るまでの制度を作り上げてきたこと。そういったことが日本の文化の大切な一面なのである。このことを、さきに触れた映画は語っている。この、生きるための英知・文化が無残にも破壊され、消えてゆくことを無視して、文化のことを語るとするのは、どこかでのが外れているのである。その的をしっかりと捉え直すことができた時に、芸術などの領域も含めて、文化についての議論は、息を吹き返すことができるだろう。

ことばの問題についても全く同様のことが言える。私たちが生活の場で使っていることばの手前勝手な側面を捉えて、例えば、旧仮名づかいを復活するべきだとかいう議論がされたりする。そこでは、ことばの慣習性、そ

して、そのことばという道具を使っている人間がいるという重要なことがらが無視されてしまっている。すでに過去のものとなってしまった文法規則の正当性が、時間を生きる人間の継続性を無視して単純に押しつけられ得るはずがない。

とぎれてしまった過去と現代をつなぐことが、もし必要なことだとしても、その判断は、一人一人のことばを使って生きている人間がしなくてはならないことである。現在、すでに馴れ親しみ、獲得した能力となっている貴重なことばの規則を捨て、復古主義に走るための意味づけが、それぞれの個人においてなされ得るだろうか。

多くの旧仮名づかい論者にとって、そのような意義づけとは、古い「文化」への同一性願望にすぎない。すでに述べたように、文化は、その生きる場での人間の英知としての意味づけがなされないかぎり「死に体」なのである。現代の日本社会で生活している私たちの大多数にとって、日本の近代以前の文化が生きたものであるとはとても思えない。人間にとって過去との結びつきが稀薄であることは悲しむべきことであるが、しかし、複雑な現実を無視してことばの問題を勝手気儘に議論してはならない。

ことば、そして文化が、自分にとってかけがえのないものである一方、逆に自分の生活がそれを支え、意味ある物にしているのだという認識がなければ、ことばや文化に真正面から取り組もうとする関心は育まれ得ない。ことばや文化についてオザナリに対処し、デタラメに扱う、ごまかすということに対しては、はっきりと異議を唱えなくてはならない。そのためにも、私たちにとって、この問題を自分のものとして、大きな拡がりの基盤に成り立つ対象として整理してゆくことが大切である。

第三部文献：

- Frege, G. (1892) : “Über Sinn und Bedeutung.” In *Funktion, Begriff, Bedeutung*. Hrsg. v. G. Patzig, Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1982. (土屋俊訳)「意義と意味について」, 勁草書房刊『現代哲学基本論文集 I』所収, 1986)
- Grice, H.P. (1975) : “Logic and Conversation”. In P. Cole and J. Morgan (Eds.) *Syntax and Semantics vol. 3: Speechacts*. New York: Academic Press, 1975. PP. 41-58.
- Habermas, Jürgen (1981) *Theorie des Kommunikativen Handelns*. Frankfurt/a. M. (河上倫逸, 他訳「コミュニケーション的行為の理論」, 未来社, 1985)
- de Saussure, F. (1916) : *Cours de linguistique générale*. Ed. by C. Bally & A. Sechehayé. Paris/Lausanne (小林英夫訳『一般言語学講義』, 岩波書店, 1940)
- Searle, J. (1969) : *Speech Acts, An Essay in the Philosophy of Language*, Cambridge Univ. Press (坂本, 土屋訳, 『言語行為, 言語哲学への試論』, 勁草書房 1986)
- 田中克彦 (1978) : 「言語からみた民族と国家」, 岩波書店
- (1981) : 「ことばと国家」, 岩波書店
- (1983) : 「法廷にたつ言語」, 岩波書店
- 陳 瞬臣 : 「アヘン戦争」, 講談社文庫
- Wittgenstein, L. (1918) “Tractatus logico-philosophicus.” In *Ludwig Wittgenstein, Schriften I*. Frankfurt/a. M. : Suhrkamp 1969. (坂井秀寿訳「論理哲学論考」, 法政大学出版局刊『論理哲学論考』所収, 1968)
- (1945) “Philosophische Untersuchungen”. In *Ludwig Wittgenstein, Schriften I*. Frankfurt/a. M. : Suhrkamp 1969. (藤本隆志訳「論理哲学論考」, 法政大学出版局刊『論理哲学論考』所収, 1968)
- 柳父 章 (1986) : 「ゴッドと上帝, 歴史のなかの翻訳者」, 大修館

## On Language and Culture

— To Avoid Confusions in Discussing Language and Culture —

Part three : Revitalizing our Life with Language and Culture

Yoshiharu Takeuchi

### Summary

Language meanings are normally interpreted in real communicational contexts including social, cultural, political, historical as well as other factors and they can have various effects on the world. Not only an ordinary speech act can be performed, but also a manipulative interaction with a person or a social group. Thus, language in use can have the power of both influencing, and changing the world.

The effective functions of language use have their origins not only in language itself, but in the concrete socio-cultural relations and human activities as well, which make up the entire world-reality. Human actions with language are based on a rich cultural foundation, and this again is based on very complex social, political, historical, and other factors.

An irrational use of language, for example, can be criticized correctly, if we recognize it not only as a language matter but as a more complex matter, which can be observed in the wide and comprehensive view proposed in this series of discussions. We must have deep and accurate knowledge of both how language functions and gets its meaning in the real context. We can thus avoid misuses of language, which can possibly cause troubles which can eventually disturb rational human lives and social relations. Moreover, we are then able to make our language-actions as reasonable as possible based on our own judgement, which of course, is one of most important factors for the world to progress in a democratic and peaceful way.